

Soul Food

ど
こ
か
懐
か
し
い
優
し
い
味
わ
い。



「かきまでごはん」

(和歌山県・印南町)

「までごはん」とは、いわゆる「まぜごはん」のこと。和歌山県人は「さじずせそ」を「だぢずで」と発音してしまうことから「までごはん」と呼ばれ親しまれている。まぜごはんは全国で食べられているが、印南町では焼きサバを入れて風味を出し、お酢を使わないのが大きな特徴。そのほかにも高野豆腐、地元の名産絹さやえんどう豆などの野菜を使い、冠婚葬祭や運動会など、人々が集うときに作られてきた郷土食である。印南町では、現在いなみの魅力発信！「地産外銷」

プロジェクトとして「いなみの食」のブランド形成をすすめている。この取り組みの一つとして、「かきまでご飯の素」がレトルトパックで発売されることになった。「いなみの料理広め隊」が全国各地でPRを行っており、3月25日に開催された龍谷大学社会連携・社会貢献活動報告会の交流会においても振る舞われ、大変好評を得た。味は、ほどよく焼きサバの風味が効いており、しいたけの甘さやえんどう豆のふっくらした食感も楽しめる。

社会連携・社会貢献活動 報告会で振る舞われました。

(於：深草学舎2018年3月25日開催)

龍谷大学が目指す「地域に根ざした大学づくり」の内容を行政、企業及び一般市民の方々等参加される皆様を知っていただき、皆様からのニーズや助言を頂戴いただくことで、より効果的な活動へと発展させることを目的として毎年開催している社会連携・社会貢献活動報告会。講演会や事例紹介など、地域連携に興味のある方はもちろんのこと、龍谷大学と縁のある地域の物産品や産学連携により生まれた逸品を味わえるなど、どなたでも楽しめる内容となっている。



「龍谷ソーラーパーク」で 繋がったまち

和歌山県のほぼ中央にあって、美しい海と山に囲まれたまち。太陽と黒潮の恵みで育まれた野菜・花・果実などの特産品が豊かで、かつお節や真妻わさび発祥の地。熊野古道の要所であり、歴史的・文化的遺産を今に伝える。龍谷大学が全国初となる地域貢献型メガソーラー発電所「龍谷ソーラーパーク」を設置したことを契機に、2014年9月に連携協力に関する協定を締結し、さまざまな交流事業が実施されている。まちを訪れると、ユニークな佇まいの「かえる橋」が迎えてくれる。そして、行く先々で人々の温かさに触れ、疲れたココロとカラダが癒されるまちである。

いちごと同じ糖度を誇るミニトマト「赤糖房（あかとんぼ）」



とっておき RECIPE

予め、米に酒を入れ、少し固めに炊いてください。

材料：3~4人分

- 米……………2合
- 酒……………20cc
- 焼きサバ……………1本
- 人参……………2/5本
- 高野豆腐……………9g
- しいたけ……………1枚
- 油揚げ……………1/2枚
- ちくわ……………1/2本
- こんにゃく……………1/5丁
- たけのこ……………20g
- しょうゆ……………40cc
- さとう……………48g
- サバの骨のだし汁……………120cc



① 焼きサバの身から骨を取り、ほぐしておく



② サバの骨に水を入れ、わかしてだし汁を取っておく（3カップ分）



③ 材料はそれぞれ下処理をして、細かく薄切りにする。



④ ②のだし汁に①と③の材料を全部入れ、しょうゆ、さとうを加え、煮る。



⑤ 温かい白ご飯に④を混ぜ合わせる。（④の調味出汁は全部いれない）



⑥ おいしいかきまでごはんの完成。

発売予定の「かきまでご飯の素」。本学でも振る舞われ、大変好評を得た。



EFFECTOR

for an Inclusive Society

To Encourage Community Engagement • Volunteering • Sustainable Solution

002

変人 一変える人—

「誰もが活躍する社会」を目指して
株式会社 革靴をはいた猫

003

Special Contents

「大学は地域のために何ができるのか」
龍谷大学社会連携・社会貢献活動報告会
パネルディスカッション

004

Soul Food

和歌山県・印南町
「かきまでごはん」



町家 de うどん

1人でも多くの学生が地域に関わりを持つこと、関心を持つことを目指した「地域デビュー」プログラムとして2016年にスタートした「町家deうどん」。

築150年以上の京町家（龍谷大学深草町家キャンパス）で老若男女を問わず、本格的なうどん作りを楽しんでいる。うどんづくりを指南しているのは、深草を中心に伏見区で地域活性化に取り組んでいる学生団体「京まちや七彩コミュニティ」と学内で公募された「町家 de うどん学生スタッフ」。農学部朝見祐也准教授の指導の下、うどんづくりの知識と技術を身に付けた。時間と手間がかかるものの、一から全ての工程を経験するこのイベントは親子や地域の高齢者、交換留学生にも大変好評で、募集するたびにまち定員が埋まるほどの人気がある。このイベントを契機として多世代、多文化交流に興味を持ち、地域で活躍する若者も多く輩出していくとともに地域に大学があって良かったと1人でも多くの住民に思ってもらえることが私たちの願いだ。

変人

変える人



政策学部の「伏見わっしょい新党」での活動が原点

僕は、Ryu SEI GAPの活動のひとつ「伏見わっしょい新党」で若手農家と消費者を繋げる活動をやっていた。そのことを深草キャンパスのカフェ樹林の当時の店長が大学の広報紙で見ていただいたことをきっかけに、樹林で僕たちの野菜や商品を扱っていただくことができました。まずは、自分たちが作っていた野菜のケーキを樹林で販売させてもらいました。そこからこの活動を障害のあるカフェ樹林のメンバーの就労支援にも活かさないかという相談があって、当時一緒に活動していた友人と話し合って「それなら、同じ政策学部のメンバーや他学部の学生も巻き込んで樹林を盛り上げよう」ということになったんです。それが「チームノーマライゼーション」です。そしてマルシェやコーヒーイベントなど、いろんな企画をみんなで作りあげました。そんな中で、カフェの売り上げを向上させたり、盛りあげることが大切だと思うけど、それ以上にここで働いているメンバーが成長したり自立していくためにはどうしたら良いかをチームで考えるようになりました。そこで、「働くモチベーションを上げるためには」「働くというのはどういうことか」を自分も含めて知る必要がある。それを知るためには、実際に働く場所が必要だよなということになりました。

自立するためには、手に職を付けることが必要ではないかということになって、「職人」をキーワードとして議論を重ね、そこで靴磨きがいい！という話になったんです。

※カフェ樹林…2006年4月、龍谷大学と社会福祉法人向農会が連携し、障がい者を含む様々な人々が互いに補い合い、生か合う社会を実現するため、「障がい者が働くカフェ」として深草キャンパス内に設立。



福祉系企業やベンチャーキャピタルには事業化は無理といわれた。

そこで、「伏見わっしょい新党」の活動も終了した大学3年生の秋に、「チームノーマライゼーション」の中に靴磨きタスクを立ち上げました。そして、靴磨き専門店として有名な「Burnish」（大阪・梅田）の大岡店長に自分たちの活動の趣旨や目的に共感していただいたことで、靴磨き職人の技術や姿勢を一から教えてもらうことになりました。チームの学生数人で修行を始め、4年生からは、本格的にアルバイトとしてお店に立たせてもらって、毎朝、樹林の営業前にその技術や姿勢を樹林のメンバーに伝える生活を繰り返していました。当時、いわゆる就活はやってなかったですね。気になった企業には行ってみたいけど、自分がやりたいと思っていることを実現するのは難しいなと思ったので、それを実現するために大学院に進学することを目指していました。起業を意識した頃、靴磨きの技術の反応を試してみようと思って、深尾昌峰先生（政策学部准教授）に相談して、政策学部の教授会で会議前に靴を預かり、会議が終われば靴がきれいになっているというサービスを実験的にやらせてもらった結果、とても喜んでもらえた。

しかし、障がい者を雇用了した靴磨きビジネスをやりたいと、福祉系の企業を経営されている社長やベンチャーキャピタルにも相談しましたが、ことごとくいろんな方へ事業化は無理だと言われ、ショックでしたね（笑）でも、深尾先生だけは、反応が違った。「これならいい！」と動まし

「誰もが活躍する社会」を目指して

革靴をはいた猫 代表取締役 魚見 航大さん（龍谷大学政策学部2017年3月卒業）
宮崎 雅大さん（龍谷大学政策学部 中退）
-SHOE SHINE HOME-
店長 藤井 琢裕さん
丸山 恭平さん（龍谷大学政策学部 2015年 3月卒業）

靴磨き専門店「革靴をはいた猫」が京都のビジネスの中心地、御池通に面したビルの1階に2018年2月25日にオープンした。アンティークなイメージの玄関を開けると芳醇なウイスキーの香りがふわっと鼻腔をくすぐり、「いらっしやいませ」とベストとネクタイで固めた職人のみなさんが爽やかな笑顔で迎えてくれる。まるでジャズバーにでも来たかのような佇まい。代表の魚見航大さんにお話を伺った。

でもらって、会議中に靴磨きを行う出張型営業のモデルを大学4年生の12月に京都信用金庫さんでやらせてもらうことができた。

一緒に活動した仲間が全国で応援してくれている。

普通の大学生だったら3年生、4年生になるにつれて自分の将来を見据えて活動している人が多いですね。だけど自分の場合は、障がいがある若者の働く場所をいっしょに作りたいという気持ちの方が強かったですね。親にもだいぶ心配をかけたました。ここまで活動に取り組んできて、驚くほどの短期間で障がいのあるメンバー達がやる気をもってどんどん成長していている。ここで僕が別の道に進んでしまったら、彼らの夢も削ぐことになるかもしれない。彼らが逃げずに必死でチャレンジしているのに、ここで僕がチャレンジしなかったらみんなの努力を裏切ることになるし、絶対に後悔すると思います。そして、友人たちにも相談して、悩んだ挙句、大学4年の1月にみんなの前で「会社を立ち上げます！」と宣言しました。すると、チームの同期や友人もとても応援してくれた。中でも一緒に活動していた同期の多くが「自分も京都でやりたい！」って言うてくれました。だけど、現実問題として全員分の仕事があるわけでもない、すぐに生活できる給与を支払うこともできない。だから一旦は、それぞれの道を歩むことになりました。その全国に散らばった同期が今でも各地で広報や営業活動をしてくれているので、とても心強いです。



障がいのあるメンバーからの声がかきかけで店舗を持つことに

「大学院に行くのはやめます」と深尾先生に伝えたら、それなら在学中に起業しなさいと言われました。そこで、進学資金やチームノーマライゼーションでためていた貯金などで出資金を集めて、起業に踏み切りました。一度も社会経験がないままに経営者として独立する不安はあったのですが、絶対やらないと後悔すると思っていました。だけど両親からは「いろんな人を巻き込んでお前は責任がとれるのか」といわれました。僕も確信をもって言えたわけではないですが、やらなくてはいけないと信じていた。悩みに悩んで大学院願書締切日に親に決意を伝えました。親からは真っ当な事業計画書も何もないじゃないかと大反対を受けましたが、諦めたのか、翌日からは、障がい者の就労支援や働き方に関する記事があると切り抜いてくれたりして、応援モードに180度変わってくれたんです（笑）出張型で起業して、店舗を持つのはリスクが高いというのもあったけど、それ以上に当時の障がいのあるメンバーがコミュニケーションをとることは難しいんじゃないかと思っていて、靴をお渡しするときの最低限のやりとりができればいいと思っていた。



だけど、最初は一番接客に関して遠慮がちだった藤井が「お客さんとのコミュニケーションがとても楽しい！もっとやりたい」と言い出した。（笑）そこで、自分たちもいつかお店が持てたら良いよねと思い、昨年9月にBurnishさんに相談したら、なんと月に1回、「革靴をはいた猫」に店舗営業を任せられると言ってくれたんです。さらに、僕らの活動を知ってくれたデジカメプリント店の社長からお声掛けいただき、こんな一等地に店舗を出すことができました。ホントに人の縁の力を感じます。

“障がい者が働いている”ということも言わなくてもよい。

ここに来られるお客様は、障がいのある方が働いていると知って来てくださる方と、純粋に靴磨きにごだわりのある方が半々くらいです。今はテレビや新聞に取り上げていただいたおかげで前者の方も結構おられますね。また、外国人観光客や出張で来られているビジネスマンにもたくさん来ていただいています。自分たちとしても「障がい者が働いている」ということを前面に出して言わなくても良いことが理想だと思いますし、職人としての実力で勝負したいからお店にはそれを感じさせるものは一切ないようにしています。経営面については、自分たちも楽観的に考えていたところもありません。毎日お客様は増えてはいますが、目指すところに到達するためにはもっと努力が必要です。しかし、靴に本格的なケアを施し大事に履くことや、ものを長く大切に使う文化が徐々に根付いてきているみたいで需要は高いと感じています。だから、出張営業にも力を入れていて、まずは「体験」してもらい僕たちのファンになってもらうこと、そして店舗へ足を運んでもらえないかなと思っています。この先、職人を指名されるようなこともあるかもしれません。このコソポイントを行うことや障がい者雇用の見学に来てもらうこともあって、これからの社会で障害のある方が活躍することに少しでも力になれば嬉しいですね。



代表取締役の魚見さん（左から1番目）、店長を務める藤井さん（左から3番目）、創業メンバーであり取締役の宮崎さん（左から4番目）、靴磨き職人の丸山さん（左から5番目）



株式会社 革靴をはいた猫
Change from “Taker” to “Giver”
— 与え、分かち合う存在 —
〒604-0941 京都市中京区亀屋町370-1サンルミ御池1F
京都市営地下鉄東西線 京都市役所前駅直通ゼスト御池9番出口すぐ
【営業時間】 10:00～19:00 Tel. 080-2619-2843
【定休日】 なし Mail shoeshine.cat39@gmail.com
【靴磨きサービス】 ¥1,080～ www.shoeshinecat39.com

Special Contents 「大学は地域のために何ができるのか」

社会連携・社会貢献活動報告会 パネルディスカッション

龍谷 大学社会連携・社会貢献活動報告会が開催され、やきそばとダジャレで富士宮市に約660億円の経済効果をもたらした地域活性化の仕掛け人 渡邊英彦氏（富士宮やきそば学会会長）による講演や、学生による社会連携・社会貢献活動事例の紹介が行われた。

今回は、その社会連携・社会貢献活動報告会の中で行われたパネルディスカッションの様相を紹介する。



深尾 昌峰
（龍谷大学政策学部准教授）

黒田 恭史
（京都教育大学教育学部教授）

八幡 耕一
（龍谷大学国際学部准教授）

西山 大樹
（龍谷大学政策学部3年生）

高草 圭吾
（龍谷大学国際学部3年生）

葛城 元
（京都教育大学大学院2年生）

深尾：「大学は、社会のために何ができるのか」というテーマでパネルディスカッションを行いたいと思います。学生のみなさんは、楽しいことが溢れていて、遊ぶ時間やアルバイトに精を出すこともできるのにもかかわらず、地域に入り、社会のために様々な活動をおこなっていて、私の学生時代と比べても本当にすごい、尊敬に値する、素晴らしいことだと思っています。だからこそ、「なんでこんなことやってるの？」っていうことを敢えてここで聞いてみたいのです。正直、困ったり、嫌だったり、面倒臭いと思ったことないの？

西山：東日本大震災復興支援ボランティアに行く際などに、友達や親戚に「何しにいくの？」って聞かれたことが少し嫌でした。たぶん、7年も経ってからのことなんであるのかと疑問に感じて僕に聞いたと思うのですが少し不愉快に感じてしまいました。

高草：僕たちは、京阪ホールディングス株式会社さんと「京阪沿線活性化プロジェクト」を七条～東福寺エリアで取り組んできました。このプロジェクトは学部、学年を越えて、しかも留学生も巻き込んだ正課外の取り組みです。プロジェクトメンバーは公募で、応募者から選ばれた仲間と取り組んだのですが、時間が経過するにつれて、メンバー間のモチベーションに温度差を感じました。この温度差を埋めるためにはどうしたら良いのかとても悩みましたし、リーダーシップに関する本を読んだりもしました。また、実質活動期間は半年だったので、それまで見ず知らずのメンバーで短期間にプロジェクトを完遂することの難しさも実感しました。

葛城：僕は、オリガミを数学的に解説する研究会などに参加していて、地域住民や子どもたちを対象に募集をかけるのですが、がんばって広報した割には、いざ、ふたを開けてみると応募者1人だったりして、落胆することもありました。また修士論文の執筆等で繁忙期に入ると今度は、こっこのモチベーションまで下がってきて、キープアップすることが大変でした。

深尾：うーん、なるほど。本当はもっとドロドロした、生々しい嫌々感が出るかと思ったんですが、みなさん意外と優等生な意見ですね（笑）といえ、学生たちがこんな負担を背負いながらも、継続して活動しているのは、やはり自分たちの活動に意義を感じているからなんだと思います。さて、先生方、まずは黒田先生は、地域連携、社会連携といったジャンルをバリバリやっておられる先生なんでしょうか？

黒田：いえいえ、私は数学、算数教育の研究者、専門家であり、このジャンルは素人です（笑）京都市立龍谷大学は、1学年300人、全校学生1,200人、教員も100人程度の小さな大学ですが、各教員はなんでもやらなくてはいけません。人が足りないですね（笑）また僕は、数年前にある私大から移ってきたのですが、前の大学と比較すると予算もつかない、でも、お金がないとも言ってられなくて、工夫しながら新しいことや、地域社会との取り組みもどんどん取り組んでいきたいと思っています。

でも、京都教育大学に移ってきてよかったのは国立大学というブランド力が大きいことです。デパートの包装紙みたいなものです（笑）。地域をはじめ様々なことを連携するにあたって、大学のホームページに掲載しますというだけで喜んでもらえることもあるし、このブランド力は大いに活用していきたいですね。

深尾：なるほど、デパートの包装紙ですか。高島屋や丸九の名前が入っ

ているとありがたく感じますね。大学が持っているブランド力というのは大いに活用していくべきですし、その効果は連携先にも喜んでもらえるということですね。

では、次に八幡先生に伺ってみたいと思いますが、高草君が紹介してくれた「京阪沿線活性化プロジェクト」はプロジェクトメンバーが公募される課外プロジェクトであることはご紹介しましたが、なんとこのプロジェクトはコーディネーター教員も学内公募で決められます。八幡先生、こういった活動の経験、ご指導の経験はありましたか？なぜ応募されたのですか？

八幡：僕の専門はメディア論です。以前、民間企業との連携は授業でしたことあったのですが、学部横断的な課外プロジェクトというのは初めてです。学内公募に応募した時は、「たぶん多くの教員が手を挙げたろうから、選ばれなくていいや」くらいの感覚でした。そして、直ぐにRECから「先生お願いします！」って電話がかかってきた（笑）学生も私も本業（正課）がある中でのことなので、運営には苦労するところもありました。やはり課外なので無理はいえなし。けど、やると決めたプロジェクトなのでしっかりと成果は出したいという思いがありました。蓋を開けてみると強制力が学内プロジェクトに取って応募してきたメンバーなので、意識の高さには本当に感心しました。

深尾：なるほど、課外のプロジェクトなので単位という、学生にとってのインセンティブはないわけですが、正課の取り組みとは具体的にどのような点が違いますか。

八幡：僕が担当している取り組みでは、偶然かもしれないですがみんなやる気はある。ただし、経験がないから、やり方がわからない学生が多い。この戸惑いを成長に繋げるか、モチベーションを下げてしまおうか大きな分岐点で、我々教員としてはサポートの難しいところですね。特に、授業だと学生にとってのメリット、デメリットがはっきりしていますが、課外プロジェクトはそれがわからないから全員のやる気を同じ水準に維持させることが難しい。

深尾：では、学生のみなさんには、なんでこんなことやってるのか、その理由というか意義はこれだと表現するキーワードをフリップに書いて発表してもらおうと思います。では、まず、西山君どうですか？

西山：キーワード「否定した人に伝える」僕は震災のことを未来に生かしていきたいと思っています。先ほど述べたように、「7年も経ってからのことなんであるのか？」とされている人たちがボランティアをする人特別視する人たちがいますが、僕たちは普通の学生の学生です。特別ではない普通の学生の僕たちが、震災を無縁だと思っている多くの人たちに、震災で起きたことや今もなお続いている被害、新たに起こっている問題を伝えることに意味があると思っています。そうすれば、より身近に防災・減災について、考えてもらえるのではないかとという想いで活動しています。

高草：キーワード「失敗すること」僕は、今回のプロジェクトに応募し、リーダーにも自ら立候補しました。これまでも、いろんなところで発表する等、リーダー的な立場で人前では、学生が地域住民との交流を通じて自分と周囲の意識をいかに変えることができるかが肝なのかなと思います。そのためにも、彼らのような学生を1人でとても多く輩出していけるようにしていかなくてはならなくないと改めて感じるようになりました。本日は、みなさんありがとうございました。

すが、失敗から学ぶこと、成長させてくれることも多いと感じることができました。

葛城：キーワード「これが教育」僕は、高校数学を高校生に教えるのが得意だったし、好きだったので、小学生に算数の出張講座をする機会をいただいて、自信満々で、これまでの感覚で生徒と接してみたら、全然うまくいかなかった（笑）だから、算教を楽しんで学んでもらうために折紙を通じた教育を実践してみました。すると、子どもたちが楽しんで理解してくれる。単なる答え合わせでなく、その過程を楽しんでくれるのが嬉しかったし、手応えを感じました。苦労はしましたが、「これって自分が教育されているんじゃない？」って思って、教育者としての自分の経験値が上がった気がします。

深尾：ホントにいろんな活動があると、いろんな経験が聴けて楽しいですね。みんなのような学生は、どちらかといえば少数派なのかもしれない。これだけ、地域活性化や地方創生など叫ばれても自分たちの問題として咀嚼できている人はまだ少ない。だからこそ、これからの未来に向けて発信し続けることが大事なだろうなと思います。地域連携ってこれまで奉仕的な位置づけがなされてきた。それはそれで素晴らしい、崇高なものだけでも、贖罪的な感覚があったし、付け加わってきたものという感じがしていた。だけど、様々な関係性や連携から新たな学びや成果が生まれていることは事実だし、これって教育や研究の本質のような気もする。その意味では、京都教育大学のような教員養成系大学が率先して取り組むことは日本の高等教育に大きなインパクトを与えことになると思う。パネリストの先生方は今後の地域連携の可能性、意味をどうお考えですか。

黒田：我々のような大学では、こういった課外プロジェクトを立ち上げるのは相応の覚悟とエネルギーが要ります。だから、ゼロからスタートするのではなく、クラブ活動など既存の団体の資源、経験を有効に活用することと、外部への見せ方にはこだわってきたい。京都市には、全国の中学生の63.2%が遠足や修学旅行でやってくる、京都教育大学を巣立って教員になった人材が、各地の生徒を連れて再び京都を訪れることも大いに考えられる。だから、今回学まち連携大学促進事業で取り組んできたこと、経験を踏まえて各地で教育に活かしてほしいと考えています。

八幡：今回のプロジェクトは、京阪ホールディングス株式会社との連携でしたが、連携先にとっては正課であるが課外だろうが関係ない。先方もこのプロジェクトに真剣に取り組んでる限りなので、学生に対して成果として求めるものも一定の水準以上である必要がある。露骨に落胆されることがあるし、怒られることもある。だけど、こうした経験は普通の大学生では経験できない貴重なもの。ぜひ、いろんな社会人と触れ合って学ぶ機会を貪欲に見つけてほしいと思います。

深尾：「大学は地域のために何ができるのか」というテーマで話を進めてまいりましたが、地域住民の目的を達成、表面上の問題を解決することも大事かもしれませんが、持続的で自立した地域を形成するためには、学生が地域住民との交流を通じて自分と周囲の意識をいかに変えることができるかが肝なのかなと思います。そのためにも、彼らのような学生を1人でとても多く輩出していけるようにしていかなくてはならなくないと改めて感じるようになりました。本日は、みなさんありがとうございました。